

題:『友達のトモダチ』

作: 久納 一湖

•あらすじ

見た目は怖いけど、カワイイものが大好きな直史。
ふんわりした外見だけど、ハードボイルドな美奈子。
そして、自由な旅人である涼くん。

ある日、カフェに寄った二人は、それぞれの出会いについて振り返る。話題は自然に涼くんの話になり……。
「気づいたら仲良くなったあの人」のお話。

•特記事項

昨今、生活がスマホに侵略されているため、作品の中くらいはデトックスしたくスマホの存在を消去しました。

•本文文字数

4500字

•本文

一に観察、二に決意、三に構わずそれ突撃……なんて言ってみたりして。

私は今、人生初の戦いに挑んでいる。

両手で強く握りしめたマシンガンは、私の緊張を汲み取ってか今はおとなしくしている。けど、熱い火を噴く瞬間を今かいまかと待ち構えているのが良くわかる。私は壁に背を預け、敵の様子をそっと伺った。木箱の奥に二人。動きは無い。私の対角線上後方に構えている相棒は、大きな身体を竦ませて、どこか不安げにサインを待っていた。それをよそに、私は壁から大胆に身を乗り出し、銃声を唸らせた。一発は着弾。相手が怯んだうちに相棒に素早くGOサインを送った。相棒は「ひええ」なんて言いながら、マシンガンを抱えて足をバタバタさせた後、再び私の背後についたようだ。「その装備は何のためにあるの？ あなたの抱き枕じゃないのよ」と辛らつな言葉が吹き出そうだったけど、私はこらえた。相棒が戦場に慣れるまでは私がカバーしなければ。それがリーダーのつとめ……！

こちらが前進すると、敵の攻撃は激化した。頭を出すタイミングを間違えれば終わりだ。すると、後方に構えていたはずの相棒が、何かにつまずいたのだろう。壁から勢いよく飛び出す形になってしまった。相手に捕捉されてしまう。私はとっさに彼のカバーをしようとしたが、……間に合わない！

「ヒット！ ひええ、もう撃たないでえ」相棒が情けない声を上げながら両手を上げてて身をすくめた。

「え、もう？ まだ五分もたってないよ。って、あ！」応戦しようとマシンガンを構えたが間に合わず、私の迷彩服にも「ぺちっ」と何かが弾ける音がした。

「……ヒット」

私は半眼でそう申告して、転がったBB弾をつまみ、無言でフィールドを後にした。おまえが致命打か。

初めてのサバイバルゲーム、私と直史は参加したチームで一番に退場になった。

……無念だわ。

「あっさり負けてしまった」

肩を落として美奈子が言った。

「惜しかったと思うよ」

直史はスッキリとした顔で返事をする。まるで先程の姿など無かったかのような物言いだ。

「どこが惜しいのお。瞬殺だったじゃない」

美奈子はケラケラ笑いながら、装備を外してカゴに戻している。リベンジしよ、とぼやきながら手で髪を梳いた。

「でもさ、どうしたの？ 急にサバゲー体験したいだなんて」

「ストレス発散に新しい刺激を追い求めているの」

美奈子はそう言って、左手で作ったジェスチャの銃にフツと息を吹きかける。

「そういうこと～？ じゃあさ、新しい刺激ってことで、この後は甘いもんでも食べに行かない？

駅前に新しいワッフルのお店ができたんだ」

「……そうねえ、気分変えて行きましょうか」

美奈子にはっこり微笑み、更衣室へ向かった。

ワッフル店に着くと、店内はほぼ女性客で埋まっていた。ラフで体格のいい直史が入店すると別の意味で目立ったが、美奈子が居るおかげで緩和された気がした。

店内に充満する甘い香りと、パステルカラーの色どり、壁に散りばめられたレース模様にも、自分たちは場違いではないだろうかと思美奈子は少し心配した。

席に案内された二人は華奢な椅子に身体をうずめる。木枠が軋んだ気がした。贅沢を言えばソファ席でゆったりしたかったが、さすが人気店。混雑しており、入れただけでもラッキーだと直史は思った。少し窮屈に感じるが、乙女心をくすぐる椅子に座れるのも美奈子と一緒に来ているからである。

そんな美奈子はアルバム型のメニューを開いていた。迷っているのか眉間にシワを寄せて睨みを効かせている。一方の直史は、瞳を少女のように煌めかせて、アルバムに貼られたポラロイド写真を眺めていた。ふと直史が顔を上げると、美奈子がブツブツと何かをつぶやいている。よく聞いてみればカタカナで埋め尽くされたメニューの音読で、それはまるで呪文のようだった。

直史の誘導により、ようやく美奈子もワッフルを決めると、やがて大きな皿とカップが二セットずつ運ばれてきた。器用にナイフとフォークを使って食事する直史を横目に「こいつは意外と品があるんだよな」と思いつつ、美奈子は口いっぱい広がるベリー風味を楽しんだ。口の端についたホイップをペロリと舐める。甘さのほとんどない、クッションのようなクリームだった。

「涼くんも誘いたかったな。サバゲー」

直史がぼやいた。

「連絡ついても、あの人が来るかなあ」

フォークでミントをすくい、皿の端に寄せて美奈子が言った。直史は迷いなく頷く。

「来たら楽しんでくれるはず！」

「きっと開始直後に負けるか、笑顔で全員ぶっ倒すかの二択よね」

「それは言えてる」

直史は目線を上に送った。そこにスクリーンでもあるのだろうか。写っているとすれば、素早くフィールドを移動し、巧みにハンドガンを操る朝比奈涼の姿だろう。

「スパイ戦で敵地に送り込みたい」と、美奈子が言うので、直史は「ふふっ」と吹きだした。敵地で済ました顔をし、彼らを欺きながら一人ひとり確実にヒットさせていく涼くん。敵陣がスパイの正体に気づく頃にはもう遅く、リーダーが振り返ると笑顔で銃口を向ける彼の姿が……。そんな展開をイメージすると、驚く程しっくりきてしまった。

「今は何処で何をやってるんだろうね」

美奈子が聞いた。

「噂では株で稼いだお金で日本を離れたって」

「誰の噂？」

「風の噂」

直史はマグカップに口を着ける。ワッフル以外こだわりはなさそうに見えたが、この店はドリンクメニューも充実していた。たった今挽いた豆の味がする。人気なわけだ。

「本当のところ留守電が残ってた。チェコに行くって」

「なんでまたチェコ？」

美奈子は頭の中にボンヤリとした世界地図を広げた。どこなのかパッと思い浮かばない。地理は苦手だ。

「それは帰ってきた時に聞く楽しみじゃないか。おおかた壁に貼り付けた世界地図にダーツでも投げて決めたんだよ」

ケラケラ笑っている直史を見て、美奈子はつくづく“こいつは本当に涼くんが好きで、いつも必ずこの街に戻って来ると信じてるんだな”と思った。幸せ者である。ふと、彼女が尋ねた。

「そもそもよ、どうして二人は仲がいいんだっけ？」

「えー？ なんでだろうね。最初にバーで会った時の話はしたことがあるような気がするけど。その後も顔を合わす様になって徐々に……って感じだと思うよ。美奈子さんともそうでしょ？」

「言われてみればそうね」

「美奈子さんとの場合なんて、ウチに掛けてきた間違い電話が最初だったじゃない」

「そうね、人間、なにが起こるか分からないもんよねえ」

美奈子はそう言って、やや大きめのサイズに切り分けたワッフルを頬張った。

直史はきっと、家に帰るたびに留守電再生を楽しみにしているのだ。それは恋とか愛とかではなく、サンタクロースがやって来るかもと期待する子供に似ている気がして、美奈子は微笑ましく思った。

直史によると、涼くんが留守電に残す時は“何日の何時頃にいつもの店に顔を出すよ”といったメッセージが入っているらしい。直史はそれを聞いて、都合が合えば店に向かう。そして特に派手でもない、誇張もない涼くんの土産話に耳を傾けるのだという。それを聞いていると、子供の頃に読んだ絵本を思い出すらしい。あの語り口は、おとぎ話の一ページを体験している気分になるというのだ。

一見、浮世離れしている風な涼くんが、株の売買をしていることが見た目と一致せず、それが逆に美奈子の中で、彼の神秘性を底上げさせた。労働という言葉とは正反対な場所で、いつも非現実的な日常を送っている彼が一番現実的だ。かといって会社勤めが向いているとは思われないが。

美奈子は一度、いつもの店で涼くんと席で二人きりになってしまったことがあった。しかも初対面の日だ。

直史と店の階段を降りていくと、その先のカウンタに彼が座っていた。あの後ろ姿を覚えている。よく使いこまれてこなれた革製品みたいだな、と彼女は思った。二人に気がついた涼くんは、ずっと椅子から立ち上がり笑いかけた。「この人が噂の涼くんか」と美奈子は彼を見上げた。頭の中で想像していたどの涼くんとも違った。どこにでもいそうで、どこにもいないタイプだ。背は直史

と美奈子のちょうど間くらいか。二人に比べたら細かった。直史が互いを紹介し、その流れでボックス席に移動した。

しかし、ビールとナッツを囲んで話していたところ、共通の友人である直史が一時的に離席した。

職場に忘れものをした！ と言って彼は慌てて階段を駆け上がっていった。美奈子は困った。涼くんのことは話には聞いていたが、自分は社交的なタイプではない。気を利かせて話題をふるのも苦手だ。困ったように彼女が微笑むと、涼くんも微笑んだ。

そして話題は直史のことになった。共通点がそれしかないのだから当然かもしれない。涼くんは、直史と出会った日のことをゆっくり話し始めた。大げさに話すこともなく笑い話にするわけでもなく、朗読のような語り口を思わせた。直史の例えが案外的を得ていたと感じた美奈子は、静かに彼を観察した。たまにグラスを傾けて反射する光を眺める様子は、自分よりもはるかに年上のように見えた。

話題が途切れても、誰のスキャンダルや愚痴も言わず、目の前に置かれたワインのうんちくを述べることもせず、彼は静かだった。彼はまるで、ずいぶん遠くで生きているような印象を与えた。涼くんの本体は目の前にあるが、ずっと遠くに離れている彼の意識に見つめられている、そんな印象だ。美奈子も少しだけ、直史について話をした。

後で思い出したが、涼くんは、あまり自分のことを話さなかったように思う。家に電話はなく、いつも直史には公衆電話から連絡をとっているということの話しただけだ。ただ、美奈子の話に耳を傾け、ゆっくり頷き、ちびちび酒を飲んでた。たまにナッツを歯で砕く音が、彼の軽快さを表していると美奈子は思った。また、少し期待したが、酔っ払って別人になる姿は見られなかった。

この静かな時間は、約四十分ほど流れた。直史が戻ってきて席が賑やかになっても、涼くんのまわりだけ雰囲気違った。美奈子の持っていた緊張も、直史が発した動揺も歓喜も、彼の前では影響を及ぼさない。何にも縛られない振る舞いを羨ましく思った。彼は何を気にするでもなく、自分の世界を展開するわけでもなく、ただ彼のまま生きていた。別れ際、彼は美奈子に「会えて嬉しかったよ」と言って影を溶かすように去っていった。

そんなことをうすぼんやり思い出し、美奈子がつぶやくようにいった。

「今度はさ、やっぱり涼くんも誘って行こうよ。サバゲー」

「賛成賛成」

「ちょっとさ、涼くんの銃さばき、見たいよね」

「いつ帰って来るかなあ。次に電話がきたら誘ってみるよ」

「……涼くんさ、私に”会えてうれしかった”っていったの。初対面の時」

「言ってたね」

「そういうの。やっぱさ、うれしいよね」

「でしょ！？ 俺も嬉しい！」

子供のように笑う直史を見て、美奈子もどこか満足そうに頷いた。そして最後のワッフルを頬張った。

その一ヶ月後、美奈子は人生二度目の戦いに、今度は三人で挑むことになった。

おわり